

竹本穂山とその周辺

——三河の漢詩人（二）

石井真美子

三河出身の漢詩人として、前稿「佐藤碧海の生涯と詩——三河の漢詩人（一）」（上）は「學林」第七十五號、中國藝文研究會、二〇二二年十二月、（下）は「學林」第七十六號、二〇二三年六月）では佐藤碧海について述べたが、本稿では寶飯郡爲當（現豊川市爲當町）の人、竹本穂山を取り上げたい。加えて、彼が交流した漢詩人のうち、同じく三河に關わりのある平松東靄、戸田靜學、針谷重懋について言及する。

一、竹本穂山の生涯

竹本穂山は、諱は諒、字は子直、はじめ鏡湖、のち穂山と號した。幼名は柳次郎、のちに竹本長三郎家を繼いで長三郎を襲名、家督を譲つたのちは元倭と改名した。天保十年（一八三九）に生れ、明治三十八年（一九〇五）に歿した。享年六十七。穂山の生涯は『竹本元倭翁と其一族』（那賀山乙巳文、東三文化研究會、一九三五年、以下『翁と其一族』と略稱）に詳しい。以下は同書にもとづき概要を挙げる。

竹本家は清和源氏を遠祖とする家系で、遠祖の政季は建武年間（十四世紀）に東三河の竹本郷に居を移し、竹本を名乗るようになったという。七代後の竹本四郎左衛門が今川義元に仕え、今川家の没落後、竹本郷の居城を捨てて爲當に居を移し、爲當竹本家の始祖となった。

竹本城趾は現在も爲當町に隣接する豊川市御津町にあり、石垣の一部

が残る程度で城趾としては小さいが、地元民に愛される史跡である。

穂山は爲當竹本家の十代四郎左衛門有國の五男として生まれ、安政六年（一八五九）二十一歳のとき、竹本長三郎家を相續した。もとは兄の政昭が五代となっていたが、安政四年（一八五七）に若くして亡くなったため、穂山が六代を繼ぐことになったのである。長三郎家は、竹本家と縁組をして爲當で製油業を開業した坂藏元信を始祖とする。穂山が繼いだのち、當時低迷していた家業を再興させたという。その製油業は現在、竹本油脂株式會社としてJ R蒲郡驛前に本社と工場を構えている。

文久三年（一八六三）に二十五歳で寶飯郡御油助郷總代に選ばれ、慶應元年（一八六五）には二十七歳で爲當村組頭役となるなど、穂山は若くして村の重役を擔った。明治十一年（一八七八）には四十歳で初代寶飯郡長に任ぜられ、様々な役職を歴任し、東三河の行政・農業・教育の發展に盡力した。『東三河産業功勞者傳』（豊橋市立商業學校、昭和十八年（一九四三）では「殖産興業に對する事績」として、道路の開通、養蠶・開墾の奨励、音羽川堤防の改築等を挙げ、「教育界への盡力」として國府村の修學館および御津村の郷學校で教授方に就いたこと、その後明治十四年（一八八二）に有志と寶飯中學校を國府村に創立し、さらにその管理運営のために寶飯銀行を設立したことが挙げられている^①。寶飯中學校は、福澤諭吉の門下である澁澤保を校

長に迎え、當時としては愛知縣内で最高の教育機関であったといふ。

明治三十三年（一九〇〇）三月、六十二歳で寶飯郡長を依願免本官となり、その後は豊橋盲啞學校の設立などに盡力しつつ、趣味である詩作を樂しんだ。明の衰了凡に深く傾倒し、常に隱徳を行うことを以て主義としたといふ。明治三十八年（一九〇五）三月十六日、腦溢血にて急逝。歿後三年の明治四十一年（一九〇八）には、竹本城趾にはど近い新宮山に頌徳碑が建てられた。三宅英熙（號凹山）による碑文は『三河金石文字集』（三河全國高等小學校長會、一九一九年）等に見える。『翁と其一族』には「竹本元僂翁五年祭新宮山碑前に於ける一族」と題した寫眞が収録されており、山の斜面にある碑の前に一族の人々が座っているのが見える。筆者が二〇二二年三月に訪れたときには山道もすっかり樹木に覆われてしまっていたが、周圍には寶飯郡出身の西南戰爭戦没者の慰靈碑など複数の碑があり、明治・大正期の寶飯郡の様子が窺える史跡となっている。

二、竹本穂山の詩

『翁と其一族』に據ると、穂山は「幼時より學問を好み、兄矩慰、弟重三郎と共に下佐脇村の叔叢禪師に就いて勉學し、長じて儒學を岡崎の曾我耐軒に、詩文を吉田の小野湖山に學んだ」といふ。叔叢禪師は、下佐脇村（現豊川市御津町下佐脇）にある臨濟宗妙心寺派の長松寺の禪僧で、同書の「竹本四郎衛門矩慰」項の註に、「長松寺に學ぶものは何れも秀才揃ひで、この頃二村に一人宛位しか入門してゐなかつたものである。こゝに竹本家は正昭を始めとして矩慰、元僂、意備の四兄弟が皆入門して勉學したのである」といふ。

長兄の正（政）昭は、佐藤又八『東參故人百家詩存』（昭和二十年

（一九四五）緒言、以下『詩存』⁴）に據ると、「通稱長三郎。湘水卜號ス。寶飯郡爲當村豪農。太田晴軒ニ學ビ詩ヲ能クス。傍ラ俳ヲ卓池ニ學ビ、湘陰堂卜號ス。安政四年六月廿三日歿三十六才」（句讀點は筆者による。以下同）といひ、吉田藩の儒學者太田晴軒に學んで漢詩を善くし、俳句を鶴田卓池に學んだ。『翁と其一族』には「彼は資性英邁、一種偉大なる風格の所有者であつた。詩文に長じ、見識に富み、書畫の鑑定などにも、傑れた鑑識眼を持つてゐた」とあり、穂山も「常に我兄弟の中では政昭に次ぐべき者はないと云つた」といふ。同書には「詠史」「蝶」の二首を、『詩存』には、以下の一首を収める。

月下梅（月下の梅）

荒圃梅花晚雪晴 梢頭月上兩鮮清 暗香浮動寒光下 誰夢佳人睡五更

次兄の矩慰は、四郎左衛門家を繼ぎ、地方官界で活躍した。『詩存』に「通稱四郎左衛門、洪水又天寧卜號ス。寶飯郡爲當ノ人。小野湖山ニ從學シテ詩ニ工也。書法ヲ秋岩ニ學ブ。額田郡長在職七年明治十七年五月十六日歿四十八才」といふ。『翁と其一族』には「富春」といふ號も載せ、「冬日田家二首」「戲述」を録し、また『詩存』には以下の一首を収める。

癸未新年訪寺井兄（癸未新年寺井兄を訪ふ）

酒洗胸塵宿累融 梅邊和氣自春風 樓窗今歲殊多景 十里新堤一望中

弟の重三郎意備は寶飯郡平井村（現豊川市小坂井町・御津町）の大林

重兵衛の養子となり、地方官として活躍したのち、歌人として、また考古學の分野でも功績を挙げた。

穂山は、「郷黨の慈父として仰がれ」(『翁と其一族』)た一方、漢詩人としても高い評價を得た。御油町で發行されていた雑誌「三河文學」⁵⁾では、穂山は漢詩の評者を擔當した。その後續雜誌「三河之友」第十二號(明治三十六年四月)「訪問録」に載せる「漢學者三宅凹山翁(財賀寺住職)(中)」に、凹山の言葉として「竹本穂山翁の詩は中々老練な作だ」という。⁶⁾また、大正二年(一九〇三)刊『豊橋一覽』(野口里吉編・刊)「豊蘭吟會新計畫」には「東參の地古來大儒あり太田錦城、小野湖山兩父子及び專詩關根癡堂、竹本穂山等皆な人の知る所にして」云々とあり、蒲郡の名所を紹介した大正十二年(一九一三)刊『磯乃花』(城南道人著、小笠原修平刊)では「嘗て詩人竹本穂山來遊の砌」云々と、漢詩人として認識されていたことが窺える。

『翁と其一族』には平松貞幹校・訓讀による「穂山樓遺稿拔鈔」(以下、「拔鈔」)が收められており、穂山の詩百首が収録されている。以下、「拔鈔」に収録されたもの以外で、「拔鈔」との重複を含め筆者が二〇二五年十月までに収集し得た詩を挙げる。評語が附されているものは同じく録し、句讀點が附されていないものについては加えた。なお、俗字は適宜正字に改めた。

丁亥新年(『三河風雅』⁷⁾、明治二十八年(一八九五)後序所收)

誦々八女兩兒男 猶有萱堂八十三 忙裏迎年笑相祝 醉餘獻壽喜何堪
聖恩新服金裝美 瘦骨殊慚白髮鬢 敢望汾陽多福老 團樂坐上興方酣

【小野湖山云】誦起二句、一家景福、不堪健羨。誦至第五句、尊萱之喜可想、敬賀敬賀。

丁亥は明治二十年(二八八七)。「翁と其一族」に據れば、實母の也須は明治三十一年(二八九八)に九十四歳で逝去しているので、「萱堂八十三」は實母を指す。この詩は『詩存』にも收められている。

故山陽頼先生有贈正四位之恩典不堪感喜賦一絶以獻靈壇前(同右)

(故山陽頼先生正四位を贈らるるの恩典有り、感喜に堪へず、一絶を賦して以て靈壇前に獻ず)

誦好助正本眞忠 直筆功同苦戰功 聖代恩旌何可止 儒林亦有一楠公

【小野湖山云】儒林楠公、可名評。

この詩は「拔鈔」にも同題で収録されている。

己丑紀元節有憲法發布之典恭記盛事

(己丑(一八八九年)紀元節に憲法發布の典有り恭しんで盛事を記す)

(『參河郷友會雜誌』第三號、明治二十二年(一八八九)二月掲載)
感泣天恩渥且優 聖謨立憲誥嘉猷 富峰雪淨三千歳 櫻樹花香八十州
豈啻文明比英獨 元知德教駕商周 微臣雖老和魂在 欲把涓埃謀報酬

【癡堂曰】瑞氣溢于紙表。

この詩は「拔鈔」には「二月十一日紀元佳節。有憲法發布之聖典。謹賦紀事。(二月十一日紀元佳節。憲法發布の聖典有り。謹んで賦し事を紀す。)」という題で収録。第三句を「富峰雪白三千歳」、第六句を「更聞德教駕商周」、末句を「唯擬涓埃謀奉酬」に作る。

題某隱居（某の隱居に題す）〔參河郷友會雜誌〕第二十號、明治二十三年（一八九〇）七月掲載）

綠樹陰森圍草廬 僅求閑地下閉居 疎々窗外千竿竹 累々牀頭數卷書 因助春耕備扈養 爲充晚酌釣溪魚 終身遁世避三顧 尙有門前問字車

【鴻齋評】孤高可羨、轉化潘安仁閑居賦來。

源右將逃難圖（源右將逃難の圖）（同右）

蛛網遮顏樹窟冥 圍來強敵劍光冷 當時若解觀天象 應說將星寄木星

【鴻齋評】轉結奇詭但是時未及夜、何以得動天象。

「拔鈔」では題を「源右將樹腹逃難圖」、第一句を「蝙蝠翩翩樹窟冥」、第二句を「圍來強敵劍光腥」に作る。

咏田賀田中定宣君還曆（田を咏みて田中定宣君の還曆を賀す）

〔參河郷友會雜誌〕第六十七號、明治二十七年（一八九四）六月掲載）
一 從天祖拓荒萊 阡陌縱橫業偉哉 海墾山開八洲遍 火耕水耨萬年培 膏腴肥沃饒民力 瑞穗豐穰阜國財 還曆田翁田產富 稻香吹入壽筵杯

自註 翁好常和歌、喜國學、故詩中多用皇朝之事、且所有田數十頃（翁好みて和歌を常にし、國學を喜む、故に詩中に多く皇朝の事を用ふ、且つ有する所の田は數十頃）。

【小野湖山曰】咏田之題、余以爲太俗、及讀全詩、反愛其閑雅、蓋他人所不及、又曰不得改一字。

【鴻齋曰】兩對嚴正、化俗爲雅。

偶感（同右）

家郷爲幸鬢絲寒 二十餘年幾苦酸 一笑溪邊婆子輩 不呼舊字只呼官

自註 予自寶飯郡副區長、轉郡長、前後通算、二十二年于斯、古書云、爲僧勿歸故郷、溪邊婆子呼舊時之名、（予寶飯郡副區長より郡長に轉じ、前後通算二十二年斯に于いてす、古書云ふ、僧と爲れば故郷に歸る勿れ、溪邊の婆子舊時の名を呼べり、と）

【小野湖山曰】競争世界有此君子、人其郷之福可賀可賀。

【鴻齋曰】是亦可祭社者。

この詩は「拔鈔」にも同題で収録されているが、自注に「古書云」以下の文が無い。

癸巳舊中秋雷雨（癸巳舊中秋の雷雨）（同右）

雷光霹靂滿西東 急雨誰思秋正中 知是廣寒宮裡戲 弄將煙火役雷公

【小野湖山曰】奇想。

和氣清公（「鴨東叢譚」⁹）第一號、鴨東社、明治二十八年（一八九五）三月掲載）

妖氛邪氣滿乾坤 吹掃當年一舌根 天日得光臨萬世 忠臣言卽是神言

以下、「宮路山」から「蜂窠巖」までは「東三名勝雜詩」（藤波一哉編『東參名勝案内』附録、參陽新報編輯局、明治三十四年（一九〇一）。國立國會圖書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/765200>）所收。

宮路山(宮路山)

登臨萬樹染來新 四面猩紅媚小春 不識天公是何宴 能教青女醉山神

千古金鑿跡已微 躊躇回首對斜暉 風流不惜採紅葉 看做人々賜錦

□(この字判讀不能)

赤阪

壽姬遺跡淡煙遮 孤驛春風感舊多 千古香魂不飛散 猶留長福寺邊花

「拔鈔」では詩題を「赤坂驛」に、第一句を「名姬遺蹟、淡煙遮」に作る。

新春登本宮山(新春 本宮山に登る)

回頭瀛海現芙蓉 眺望無疆是此峰 細水清泉流脈々 老杉長檜影重々 春風深感神明德 殘雪猶留鬼女蹤 百穀并烹投管竅 々中多 少卜豊凶

國分寺

夕陽敲報老華鯨 一吼猶存千古聲 可憫金仙金剝落 不如施主有光明

御津山(御津山)

名山亭在翠層々 風入松篁涼景興 咫尺煙波衣浦舫 西東鐵路御油燈 閑雲來伴題詩客 幽鳥馴親煎茗僧 七八州皆歸一望 心神快極 欲飛昇

豐川山^⑩

金貌不斷篆煙斜 春暖來參人益加 鶯囀孤王祠畔樹 萬燈光映紺園花

訝聽奔雷出梵城 丈餘太鼓報時聲 林泉如錦花開處 啼鳥游魚慣不驚

阪本瀑布(阪本の瀑布)

觀音山上發泉源 水落觀音山下村 高樹千章綠陰合 飛流百尺雪花翻 欣求靈境清涼醉 解脫人間炎熱煩 一浴三杯再三浴 快遊又是大悲恩

蒲郡雜詩(蒲郡雜詩)

吟遊意不在溫潮 樓上吾嫌浴客囂 好買扁舟維竹島 龍燈松下欲開瓢 午天風穩欲無波 游泳相呼浴客多 獨棹輕舟遊佛島 拾來奇介似蓮花

前芝白小魚(前芝の白小魚)

都人爭賞水晶鱗 聲價如珠色似銀 今夜芝川波上躍 明朝京國膳頭珍

春日財賀寺(春日の財賀寺)

靜坐看花世慮空 殘瓢相酌醉春風 上方欲謁觀音去 寺在香雲暖雪中 獨趁春晴試一遊 櫻花爛熳壓枝稠 千年古佛開龕處 簇々香雲護寺樓

砥鹿神社（砥鹿神社）

靈境無炎暑 森々百尺杉 一塵曾不到 涼氣滴吟杉

東上妙劉寺（東上の妙劉寺）

松間淨刹去求茶 一杵鐘聲出晚霞 水碓涓々春不息 泉流亦自助香華

白鳥村總社（白鳥村の總社）

國司班幣祭神祇 總社名存傳口碑 秋老霜林彩如錦 想看千古整威儀

豐川三明寺辨財天

世傳云力壽姬之居遺像也蓋又可眞乎

（豐川三明寺の辨財天 世に傳へて云ふ力壽姬の遺像なりと、蓋し又眞なるべきか）

浮屠崇做辨財天 又是此心非偶然 玉貌端正兼福德 花顏愛敬見嬋妍
何思雲雨爲哀別 遂使縉紳結道緣 國司館邸人去盡 名姬遺像獨千年

下地煙花（下地の煙花）

霹靂聲々西又東 錦雲玉雨蓋青空 夜來更有呈奇技 幾隊金魚躍水中

遊竹島（竹島に遊ぶ）

點塵此際不來妨 綠樹清陰天女堂 龜嶼煙波連鹿島 聖山嵐翠接神鄉
人皆閑雅舟猶穩 魚是新鮮酒亦香 尋得詩爲他日料 絕佳一々

斂奚囊

「拔鈔」では詩題を「蒲郡遊竹島」、第五句を「人皆閑雅舟猶穩」、第八句を「絕佳、一一斂奚囊」に作る。また注に「龜岩島名。聖山山名。鹿島神郷村名也（龜岩は島の名なり。聖山は山の名なり。鹿島・神郷は村名なり）」という。

長山松源院（長山の松源院）

偶因官事到祇園 多謝山僧禮偶敦 利爪千年天狗怪 妙容一寸地藏尊
閑雲曳々過牀上 清水涓々洗石根 晉代桃源虛誕耳 不如今日入松源

「拔鈔」では詩題を「遊松源院」とし、「寺在本宮山下。祕藏奇物多矣。有稱天狗爪者。又有寸餘小地藏。彫工不凡（寺は本宮山の下に在り。祕藏奇物多し。天狗の爪と稱する者有り。又寸餘の小地藏有り。彫工不凡なり）」という序がある。また、第七句を「晉代桃源荒誕耳」に作る。

阿寺子抱石（阿寺の子抱き石）

七層瀑畔石形奇 石々皆抱一石兒 救幼主趙將軍貌 奉（本？）胎皇武大臣姿 可憐到底雖頑性 堪愛從來似善慈 妙用此留人父道 磊然砂磔却人師

大野硯川（大野の硯川）⁽¹²⁾

川形似硯碧泓中 恰好雲煙淡又濃 香墨研磨花樹影 翠毫揮掃柳條風
文房知是神仙物 雅致尤成造化工 借問當年何處畫 鳳來山上利修翁

「拔鈔」では第七・八句を「借問當年何所畫 煙巖山上利修翁」に

作る。「煙巖山」は鳳來山の別名。

鳳來寺 (鳳來寺)

霸業終時金碧荒 禪宮亦自見滄桑 不知何處仙翁去 欲問當年鳳鳥翔
十二支神空黙々 一千石祿遂茫茫 攀登行者嶺頭路 依舊山亭納豆香

「拔鈔」には「三月三十日於銀杏亭同三宅凹山和田香石分得陽（三月三十日、銀杏亭に於いて三宅凹山・和田香石と同一に分ちて陽を得たり）」という序がある。また、第一句を「霸業銷沈金碧荒」、第六句を「一千石祿竟茫茫」に作る。

長篠拜鳥井勝商之墓 (長篠にて鳥井勝商の墓を拜す)
一心不可奪 磔上殺其身 義烈如金鐵 千秋泣鬼神

櫻淵 (櫻淵)

水暖垂揚睡 風輕小舫通 櫻花影沈處 魚躍錦雲中

蜂窠巖 (蜂の窠巖)

蜂窠巖下水 可汲此清流 借問新城酒 釀來似蜜不

祝詩 (「三河文學」創刊號、明治三十五年(一九〇二)四月掲載)
武士芳名古所誇 從來質直思無邪 御油橋上春風暖 吹發三河文學花

述懷 (同右)

仕爲穗山吏 老隱穗山陽 苦樂生涯夢 不離父母鄉

仙壽山避暑分韻得蕭二首 (仙壽山に避暑し韻を分かち蕭を得たり二首)

〔三河文學〕第七號、明治三十五年(一九〇二)十一月掲載

淨域清風避世囂 一池疊々碧荷搖 吟窗哦榻涼如水 不識人間砂土焦

日午高禪方丈寮 幽玄深邃世心消 翠松曾貯清風得 時向詩人坐上澆

【擔風曰】芟除俗根。幽眇清古。非胸無一芥蒂者難悟入此境。

鎌倉懷古 (「三河文學」第八號、明治三十五年(一九〇二)十二月)

將軍廟畔麥苗肥 吊古蕭條對落暉 鳩嘴金函春夢跡 栩栩蝴蝶晚風飛

【戶田靜學曰】懷古之情自溢筆端。

「拔鈔」では第二句を「吊古蕭蕭對夕暉」、第四句を「栩栩雙蝶晚風飛」に作る。

偶成 (「新愛知」¹³ 明治三十六年(一九〇三)五月二十二日掲載)

眼華耳鼓尙耽詩 一笑老來癡更癡 欲訪江湖文雅士 名流多是歲如兒

【杉南曰】穗山翁、日前過訪草堂、捉麈論文、煮茗言歡、胸臆間無一滯物、別後未幾、已覺茅茨滿衷、今讀斯詠、有親睹丰儀之想、至爲欣快、若詩之工拙、未暇精論也、意興益集、正如瓴水去壑、妙甚、名流多是歲如兒、言在此、而意在彼、所謂名流不解、

方孝孺 (「新愛知」明治三十六年(一九〇三)七月十九日掲載)

十族誅夷奈我何 哀聲徹殿哭聲多 大書四字千秋鑑 不讓文山正氣歌

【評】慷慨激越、刻露毫端、歌韻十四字、一讀之下、眉動雷電也、方正學有知、當訂知已、

「拔鈔」には、「燕王逼書讓位詔曰。不顧九族乎。答曰十族能奈我何。大書燕賊篡位之四字（燕王讓位の詔を書せしめんと逼りて曰く、九族を顧みざるか、と。答へて曰く十族能く我を奈何せん、と。「燕賊篡位」の四字を大書せり）」という自注を附す。この詩は野口寧齋主幹「百花欄」第九集（明治三十六年（一九〇三）九月）にも「穗山閑侶」の名で掲載されている。

寄懷香國土居詞宗在金澤（懷ひを香國土居詞宗の金澤に在るに寄す）

（「新愛知」明治三十六年（一九〇三）八月二十七日掲載）

遞信名官詞賦宗 平生欽慕夢音浴 高遊猶在黃金澤 壯志將凌白嶽峰 藏置雲箋看句妙 來敲茅屋記情濃 前緣廿歲無由訂 遙寄蠅頭字一封

【評】驅煙染墨、又摯又實、其交不泛、所以有此、黃金澤白嶽峰、鑄語勁麗、神光四照、令人不可逼視、幾乎極詞人之麗則、藏置來敲二句、具見深情、

「拔鈔」では詩題を「寄懷土居香國在金澤」、第二句を「平生景慕夢音浴」に作る。「新愛知」では土居香國が返した「□（應）か）穗山竹本君見寄芳韻」詩とともに掲載している。

和靜學戸田判官紀念之詩韻（靜學戸田判官「恩を紀す」の詩の韻に和す）

（「新愛知」明治三十六年（一九〇三）十月二日掲載）
御爐香篆裊春風 花映金鱗蓬島宮 玉輦焜煌輝旭日 翠華燦爛拂晴空
烈公逸事登仙簿 祖考遺篇傾聖聰 無限恩光照千古 君家長使子孫忠

【評】……穗山玉輦焜煌輝旭日。翠華燦爛拂晴空諸句、分道而揚鑣、足稱偉觀、

「拔鈔」では詩題を「和戸田靜學紀念詩韻（戸田靜學「恩を紀す」の韻に和す）」、第七句を「無限恩光照千古」に作る。

この日の「新愛知」「詞林」欄は、綿引泰（東海）、友部伸（鐵軒）、西郷裕（素堂）、竹本元傑（穗山）四名の戸田靜學の詩への和韻を掲載し、末尾に杉南がすべての詩に對して評を附している。戸田靜學の詩「四月十三日謹紀念（四月十三日謹んで恩を紀す）」は八月三十日の「新愛知」に掲載された。

癸卯陰曆中秋□（前）か）二夕紀事、以謝柳社諸君 併乞正、

（癸卯陰曆中秋□二夕の紀事、以て柳社諸君に謝す 併せて正すを乞ふ、）

（「新愛知」明治三十六年（一九〇三）十月二十四日掲載）

恰當甲子雨初收 玉兔玲瓏萬里秋 柳社諸賢邀月色 今宵好會清風樓
懇情誘我堪深謝 遺憾遲遲傳書郵 西望金城空惆悵 佳期孤負斯俊游
緬想紅燭綠尊側 敲金夏玉幾唱酬 仙艷嫦娥翩其下 桂香醞醉吹欄頭
獨憐柴戸人賞月 蟲聲唧唧滿地愁 仍有老妻伴吾醉 沙壺泥盞還風流

【評】漫爾抒詞、絕不受前人束縛、有第一等襟抱者、方能臻茲境、中幅最是勝趣、最是逸筆、風華燦然、藻葩如繪、蓋樂天之苗裔也、收局更以

口齒樸率動人

宮鶯喚曉〔百花欄〕第十四集、明治三十七年（一九〇四）二月

掲載）

金衣公子喚彫籠 曉樹蒼蒼禁苑中 五色祥煙瑞雲裡 新聲第一達宸聰

〔拔鈔〕では第二句を「曉色蒼蒼滿禁中」、第三句を「迸玉祥煙瑞雲裡」に作る。

和作（和して作る）〔新愛知〕明治三十七年（一九〇四）四月二

日掲載）

水陸堂堂仁義師 □〔膺〕か □〔懲〕か □詔煥然辭 虎吞橫暴
皇天罰 □食貪婪宇內知 日本刀鳴光閃處 哈賓城陷血流□ 紫髯
降伏應非遠 烏拉山頭樹白旗

【評】□□奔放者、其詞勢也、雄騫豪爽者、其聲氣也、而具運筆如舌、言所欲言、則幾乎得元白法乳、而虎吞橫暴皇天罰、□食貪婪宇內知、斷案如□〔鐵〕か、不可移動、紫髯降伏應非遠、烏拉山頭樹白旗、想見穗山吐氣如霓、竝稱響亮、

この詩は同じ日に掲載された致堂保科保の「拜讀宣戰 大詔」の和詩である。

雜感和杉南先生韻（雜感あり杉南先生の韻に和す）

〔新愛知〕明治三十七年（一九〇四）四月二十九日掲載）

欽羨高人占此廬 吟哦聞日興何如 特尋仙客青山藥 常借侯家玉筍書
五柳煙低元亮徑 百花香繞子雲居 酣歌坐有聖賢酒 不用門停長者車

其二

五年□〔慣〕か 得芰荷衣 獨養輕痾鎖竹扉 〔壯〕〔牀〕上琴徽
因雨緩 爐邊酒力爲寒微 海東龍劍雌雄動 朔北捷書旁午飛 且曳
枯節試閑步 燒痕唯見筆頭肥

其三

不須爭劫對棋盤 小小衡茅容膝安 弄韻黃鸝喚輕暖 催花紅杏怯奇
塞 一編殘稿存雞肋 半鼎清泉試鳳□〔團〕か 白首全忘人世味
多年嘗盡幾辛酸

其四

常欲寡尤先擇交 衰年不厭世人嘲 螻伸計較勝龍蟄 鳩拙生涯依鵲
巢 泥銚時□新□試 竹窗閑把舊詩抄 一經史〔更〕？ 爲兒孫課
便說宵□又畫茅

【九日廬主人曰】¹⁵四律、善把卷軸之精、轉勝才藻之美、一言一語、自能沁人心脾、堪人咀嚼、不易追逐也、其一、褒美之語、絡繹筆下、帷昂昂千里之駒、庶幾足受之、驚下如余、何以禁當、徒增慚愧耳、杜子美云、坐對賢人酒、門聽長者車、司空表聖云、酣歌自適逃名久、不必門多長者車、第一首末二句、湊合得妙、所謂天衣無縫者、爾餘牀上爐邊、弄韻催花、暨螻伸鳩拙諸聯、亦足擅勝矣、

和韻（韻に和す）〔新愛知〕明治三十七年（一九〇四）六月二日 掲載）

再沈石艦閉水津 決死誠忠楠子倫 舉世讚歎稱怪勇 闔邦敬仰做軍神
七生歌罷〔能〕？ 身壘粉 一片肉殘形□〔鱸〕か 鱗 義烈
千秋誰不泣 振天府必寫其眞

【評】此更復詞筆精□〔匠〕か、中佐義烈、發揮靡遺、振天府必寫其眞、一句、人人腹中有之、而人人不能筆下出之、□驪龍之珠、早歸吾翁

手□〔裏〕か）矣、

この詩は同日に掲載されている静學戸田忠正の「廣瀨海軍中佐」に和したものである。

甲沖禎介君有序（沖禎介君を弔ふ 序有り）〔新愛知〕明治三十七年（一九〇四）九月十三日掲載）

君長崎縣平戸之志士也、嘗設文明學校於清國北京、從事清人誘發矣、今茲二月、銜密命、深入危險地、行動尤勇、不幸被獲敵、遂就銃刑于哈爾濱城去、

（君は長崎縣平戸の志士なり、嘗て文明學校を清國北京に設け、清人の誘發に従事す、今茲二月、密命を銜み、深く危険の地に入り、行動尤も勇む、不幸にして敵に獲はれ、遂に哈爾濱城に於いて銃刑に就き去る、）

深入虎穴虎咆哮 萬苦千辛不厭勞 痛罵常山將斷舌 幽囚祭酒好咽毛 胡城慘澹愁雲暗 磔柱從容意氣豪 欲寫新詩弔忠烈 潛然老淚濺衰毛

自註 常山、顏杲卿。祭酒、蘇武。（常山とは、顏杲卿なり。祭酒とは、蘇武なり。）

【評】骨幹内立、風律外彰、而用意之精、立心之專、至此極矣、可謂穗翁近製中秀、痛罵常山將斷舌、幽囚祭酒好咽毛、用事活切、抗音瀏亮、李何亦將讓一籌、末二句、點破題意、具見作法之好、

この詩は、「百花欄」第二十一集（明治三十七年（一九〇四）九月）にも掲載されており、「百花欄」では序・自註が無く詩題を「弔沖禎介君忠靈」、第一句を「深探虎穴虎咆哮」、第五句を「胡城慘澹愁雲暗」、第七・八句を「欲寫新詩表忠烈 潛然老淚濺衰毛」に作る。「拔鈔」では詩題を「弔沖禎介君忠靈 并序」、序の最後の字を「云」に、第一句を「深探虎穴虎咆哮」、第四句を「幽囚蘇武好咽毛」、第五句は

「百花欄」と同、第七・八句を「欲寫新詩表忠節 潛然老淚濺衰毛」に作り、自註が無い。

綠陰讀書（綠陰にて讀書す）（同右）

遠征將士苦何如 胡地炎蒸燦石初 衰老難消憂國念 綠陰深處讀書

【評】衰老難消憂國念、是老杜之襟抱、綠陰深處讀書是小杜之意態、而自然捷利、絕迹拾綴、斯推作手、

和韻却寄（韻に和して却寄す）〔新愛知〕明治三十七年（一九〇四）十一月十一日掲載）

朝遊北市夕南村 蓬島僑居開小門 老後恩榮荷勳位 年來蘊蓄教兒孫 醉看山色兼雲影 夢伴花神又蝶魂 散髮抽簪閑自在 吟盟鷗鷺逐年溫

【評】命意和雅、遣辭勻園（圓）？、不容指摘鑄改、蓋老手能致此矣、老後恩榮荷勳位、年來蘊蓄教兒孫。散髮抽簪閑自在。吟盟鷗鷺逐年溫。並聲氣完粹、厥妙不可況、顧秋穗二翁、蚤跳脫網羅、萬里冥鴻、晏然自適、復立塵壑表、志之高、思之遠、不多讓古昔賢哲、視之彼崎嶇萬狀、仍戀戀一官者、何趨牀分上下所以有這等佳構也、

この詩は同日に掲載された秋陽鹽田義雄の「寄穗山竹本翁」に對するものである。

素盞鳴尊（素盞鳴尊）〔百花欄〕第二十四集、明治三十七年（一九〇四）十二月掲載）

斬蛇笑賦八雲詞 秀氣萬年人所知 不獨神州神武祖 國風三十一言師

「拔鈔」では第一句を「斬蛇膽、勇八雲詞」、第三句を「豈啻神州神武祖」に作る。

甲辰歲暮雜感（甲辰歲暮の雜感）（「百花欄」第二十六集、明治三十八年（一九〇五）二月掲載）

遠征人未返 歲月似投梭 民議一朝決 軍資七億多 山茶微欲笑
雨雪偶相過 報國涓埃志 奈吾衰老何

「拔鈔」では同題で「王師征戰遠 歲月若投梭 民議三句決 軍資七億多 山茶花、僅笑 江、雪、雨、相和 報國涓埃志 其如衰老何」に作る。

乙巳元旦（新愛知）明治三十八年（一九〇五）一月十三日掲載）

芙蓉峰上雪玲瓏 仙鶴聲中旭日紅 未掃兵塵橫朔北 却看瑞氣滿瀛東
捷書頻報三軍勇 有歲相歌九穀豐 椒酒辛盤須盡醉 也爲六十七年翁

【評】骨氣端莊、不淪□（織）か）佻一路、蓋入門之正、令能然也、未掃兵塵橫朔北。却看瑞氣滿瀛東。具見一開一闔之妙、芙蓉仙鶴二句、亦勝、

同題和韻（同題にして韻に和す）（「新愛知」明治三十八年（一九〇五）二月四日掲載）

丕顯神皇翼々猷 萬年無缺一金甌 受降旅順貔貅勢 決勝沙河帷幄
□（壽）か） 燦爛鸚鵡班聯紫綬 玲瓏□（蓮）か） 嶽映珠旒 新陽
宇內皆□（膽）か） 御 赫奕東方大八洲
國富民豐瑞穗中 不關螳斧漫爭雄 青松影靜御溝水 黃鳥聲和禁苑
風 并跪清齋供日膳 早朝吉例奏神宮 欲聞獻却胡騎賦 誰是今時

長嘯公

【評】錦綉同輝、金玉齊響、正稱一時瑜亮、元白皮陸、竟不得擅美於前也、穗山後詠、一二拗處、卻增詩格之適建、何等妙觀、

この詩は同日に掲載された仙湖戸田忠正の「乙巳元旦恭賦」二首に和したものである。

三、平松東靄・戸田静學との交流

穂山は、職務上だけでなく、漢詩人としても様々な交流があった。「拔鈔」の詩題に見えるだけでも、平松東靄・三宅凹山・村田梅村・小野湖山・綿引東海・戸田静學・服部擔風・土居香國といった詩人の名がある。この章では、特に平松東靄と戸田静學の二人を取り上げたい。

平松東靄は、名は篤、字は竹馬、通稱茂八。寶飯郡の人で、詩を曾我耐軒に學んだという。磐城平藩支配下では獨禮を以て遇せられ、維新後に村長・學區取締他を歴任、寶飯中學校の創立委員ともなった。明治二年（一八六九）に三河縣が國府村に創設した修道館の漢學教授となり、その後明治十四年（一八八二）に設立された寶飯中學校運営のために設立された寶飯銀行の取締役などを務めた。明治二十年（一八八七）没。『榮泉眺望廿景絶句』を豊橋市にある羽田八幡宮に奉納したという。¹⁷⁾

謄寫版の『東靄堂詩鈔』（平松彌一郎編、昭和四年（一九二九）刊）が豊橋市圖書館の橋良文庫に收藏されており、その序を穂山が書いている（句讀點は筆者による）。

晚秋天朗、叢菊將開、掃室焚香、靜坐沈思。偶平松小靄君來叩松

局。自袖中出一詩卷示、是則其先人東靄翁之遺稿也。翁自少太好吟詠、終身不棄、殆五十年間、有奇句有佳句、不知其幾千首矣。惜哉、散佚者又居多也焉。雖然能拾收得之爲此卷、又出小靄君之孝心者乎。披閱之、余則知此詩何時成此句何處得、是則花晨月夕、翁於余辱交之深可知也。然而當時與翁所交遊諸先生諸友多、皆逐年逝矣、唯知之者獨有存存而已。讀此詩、老淚轉潸然、不能禁也。聊書追懷之情以爲序。

明治庚子晚秋 友人竹本元撰并書

(晩秋天朗にして、叢菊將に開かんとし、室を掃き香を焚き、靜坐して沈思す。偶たま平松小靄君來りて松扇を叩く。袖中より一詩卷を出して示し、是れ則ち其の先人東靄翁の遺稿なりと。翁少きときより太だ吟詠を好み、終身棄てず、殆ど五十年間、奇句有り佳句有り、其の幾千首か知らず。惜しいかな、散佚する者も又居多なり。然りと雖も能く拾收し之を得て此の卷を爲す、又小靄君の孝心より出る者なるか。之を披閱するに、余則ち此の詩は何時に成るか此の句は何處に得たるかを知る、是れ則ち花晨月夕、翁の余に於ける辱交の深きこと知るべきなり。然り而して當時翁と交遊する所の諸先生諸友多し、皆年を逐ひて逝けり、唯だ之を知る者は獨り余の存すること有るのみ。此の詩を讀むに、老淚轉た潸然として、禁ずる能はざるなり。聊か追懷の情を書して以て序と爲す。

明治庚子晚秋 友人竹本元撰并びに書す

庚子とは明治三十三年(一九〇〇)で、前述のように穂山が退官した年である。

『翁と其一族』に據ると、明治になつて間もなく、穂山が御油御傳馬所に勤めているとき、東靄らとともに紀州の和歌山へ御傳馬料を督

促に出たことがある。郡中の有志とともに穂山が郡役所を設立したさいにも、東靄はその有志の一人であった。寄せられた祝詞を集めて巻物に装丁した「寶飯郡役所開廳祝詞」(愛知縣公文書館藏)には、明治十三年(一八七九)十一月四日付で「愛知縣寶飯郡三拾三番小學國府校 學務委員 平松茂八」とある自筆の祝詞が收められており、『東靄堂詩鈔』には「賀郡廳新築落成(郡廳の新築落成するを賀す)」と題する詩もある。「拔鈔」には「夏夜平松東靄君至喜賦(夏夜平松東靄君至り喜びて賦す)」詩があり、二人は公私ともに長年のつきあひがあった。穂山にとつて、東靄は中學校や銀行の設立運営に於いて苦勞を共にした仲間でもあり、その亡き友人の詩を讀み、様々なことが胸に去來したであらう。同書には穂山の「祭東靄院平松茂八君文(東靄院平松茂八君を祭る文)」も載せられており、こちらの方は『翁と其一族』の「穂山樓文稿拔鈔」に收められている。

なお、東靄の子小靄は、「拔鈔」の校をした平松貞幹(一八六七—?)である。字は子龍、通稱彌一郎、小靄は號で、のち鴻城と號した。⁽¹⁸⁾豊橋市役所に勤務し、前掲の『豊橋一覽』では「豊橋詩家」の一人に擧げられている。「新愛知」に「春初訪竹本穂山翁賦呈(春の初め竹本穂山翁を訪ひ賦して呈す)」(明治三十六年(一九〇三)三月二十一日掲載)、「讀竹本穂山翁月瀨看梅詩賦三絶以呈併正(竹本穂山翁の月瀨に梅を看るの詩を讀み三絶を賦し以て呈併正す)」(錄二)(明治三十八年(一九〇五)二月二十六日掲載)、「挽竹本穂山翁(竹本穂山翁を挽む)」(同年五月十六日掲載)が見える。また鴻城の詩集には、「新春過竹本穂山遺居(新春竹本穂山の遺居に過る)」(『鴻城閣小稿』所收)、「和竹本穂山華甲自壽詩韻(竹本穂山の「華甲自壽」詩の韻に和す)」(『鴻城閣小稿三編』所收)、「懷竹本穂山(竹本穂山を懷ふ)(甲戌)」(『鴻城閣小稿四編』所收)があり、交流があったことが窺える。

戸田静學（嘉永五年（一八五二）～昭和三年（一九二八））は、名は忠正、字は徳文。號ははじめ有終齋、のちに静學と改めた。堤静齋・三島中洲らに漢學・漢詩文を學んだ。各地の裁判所判事や韓國總督府判事などを歴任し、退官した後は豊橋で辨護士を務めた¹⁹。前掲の『豊橋一覽』『豊橋詩家』には、「名ハ忠正前豊橋區裁判所判事今朝鮮慶州ニ轉ズ」とあり、既に轉出しているのにも関わらず筆頭に挙げられ、詩人として名を知られていたことが窺える。

穂山と静學とは、親しく交流していたようである。先に挙げた和詩のほか、「拔鈔」には「戸田判事尊萱輓詞」があり、『静學詩鈔』（戸田忠保、昭和八年（一九三三）²⁰）には、穂山に關するものとして、詩四首と填詞一首が收められている。以下に挙げる。

訪穂山莊席上分韻得尤（穂山莊を訪ひ席上に韻を分かち尤を得たり）

風流罪障那時休 不是詩囚即酒囚 名士心肝原落落 英雄歲月自悠悠
琴尊黃卷閑生計 雲鶴蒼松好侶儔 修竹栽花養神術 羨君老退占棲幽

新年次竹本穂山韻（新年竹本穂山の韻に次す）

天邊嶽色玉玲瓏 海上雲霞捧日紅 胡虜簫簫屯漠北 神兵落落略遼東
東 祥光繚繞頌堯壽 佳瑞氤氳卜稔豐 勳業也無禪聖世 此身未忍付蓑翁

輓竹本穂山（竹本穂山を輓む）

訂得十年文字因 神魂來往出風塵 穂山泉石我消暑 豐水煙霞君訪春
遺墨在筐情滿紙 音容遮目淚霑巾 溘然白玉樓中去 悲矣交遊

竹本穂山とその周邊

少一人

竹本穂山五年忌辰遙奠祭壇（竹本穂山五年忌辰 遙かに祭壇を奠す）

落梅殘笛雨如塵 追想五年前度春 欲代蘋蘩惟有淚 天涯萬里暗霑巾

長相思

寄竹本穂山（長相思 竹本穂山に寄す）

穂山青 豐水青 二郡橋西長短亭 煙波無限情 芳草汀 綠楊汀
夢款仙扉酒未醒 春風花氣馨

四、『針ヶ谷重懋詩稿』

國立國會圖書館に『針ヶ谷重懋詩稿』（以下、『詩稿』）という資料がある。書誌情報を見ると、自筆、書寫地不明、一九〇四年刊とある。縦約二十三センチ×横約十六センチ。線装で、表紙はやや薄い青、題簽は無く、貼ってあった跡のみ残っている。中の紙は、折り目が破れて裏面が見える頁があるが、明治二十二年の日付で「郡長」の書付の下に「針ヶ谷重懋」の朱印が押しであり、版心には「愛知縣額田郡役所」と印字してあることから、公文書の反故紙を再利用したものと思われる。詩は墨で紙に直接書いてある頁もあるが、別紙に書きつけたものの貼り込みが多い。書きつけられた詩に對し、批正が朱で（一部分は鉛筆）書き込んである。はじめの頁の端に「感吟之餘漫加批圈／請恕踈陋（感吟之餘 漫ろに批圈を加ふ／請ふ踈陋なるを恕されんことを）」 穂山元傑」と朱による書き込みがあり、批正はほとんど穂山

の手によるものであらうと思われる。前半には批正をした日付が朱で入れているものがあり、「甲午（明治二十七年、一八九四）四月」「甲午六月」「甲午八月」「甲午晩秋」「乙未（明治二十八年、一八九五）立春」等と見えるが、後半には無い。最終頁に貼つてある穂山宛の葉書に「二十七年三月十四」とあり、恐らく書誌情報の刊年はこれにもとづいているのであらう。

作者の針谷重懋（弘化元年（二八四五）〜？）は、字は巨柏、愛知縣碧海郡西端藩士黒澤彝任の次男として江戸神樂坂の邸で生まれ、後に針ヶ谷家を繼いだ。明治十一年（一八七八）から十四年（一八八一）まで愛知縣南設樂郡長を務め、明治十七年（一八八四）から三十二年（二八九九）までは同縣の額田郡長を務めた。その後依願退職し、赤十字社名古屋支部で主事を務めたが、明治三十三年（一九〇〇）に再び南設樂郡長に任じられ、三十六年（一九〇三）まで務めた。『詩稿』に貼り付けられた葉書の文によると、退職後には東京に移住したようである。

重懋と穂山は同時期に三河地方の郡長を務め、接点が多かったと思われる。前掲の「寶飯郡役所開廳祝詞」には、明治十三年（一八八〇）十一月四日付の「南設樂郡長針谷重懋」とする自筆の祝詞がある。明治二十二（一八八九）年一月十八日の「官報」「勤勞賞與」の項に、「愛知縣ニ於イテハ土地整理事務ニ從事シ特別勤勞セシ者」として、穂山らとともに重懋は額田郡長として賞與を受けている。「教育報知」第四六一號（東京教育社、明治二十八年（一八九五）二月）に「愛知通信の一節」として「額田郡長と其學事」と題して、「郡長針谷重懋氏は教育事業には縣下屈指の熱心家の由にて頗る評判良き人なり左に同氏の教育に熱心なる證として見るべき二三の事實を擧げて貴社に報導せ

ん」云々と見え、殖産・教育に盡力した人物であったことが窺える。

『翁と其一族』によると、穂山の兄、矩慰が明治十一年（一八七八）に初代の額田郡長となり、明治十七年（一八八四）に四十八歳で亡くなったが、翌十八年に次代の額田郡長となった重懋が發企して、岡崎公園（現岡崎城公園）に彼の頌徳碑を建設したという。三河郷友會への加入については、「參河郷友會雜誌」第七號（明治二十二年（一八九九）一月）に新入會委員として記されている。『詩稿』の最終頁に貼つてある葉書に書かれた「寄穂山老先生（穂山老先生に寄す）」詩に「我年三十識先生（我年三十にして先生を識る）」とあり、若い頃から仕事上のみならず、漢詩を通じても親しくしていたのであらう。

重懋は漢詩を善くし、柳江と號した。「百花欄」には「柳江蠻史」の名で詩が見え、第三集（明治三十六年（一九〇三）三月）に「字巨柏別號牛門外史 弘化元年二月二日生 三河國西端人 南設樂郡新城町寓」との記載がある。そのほか、「水月新詩」第一集（村田梅村編、豊原堂、明治十三年（一八八〇）十二月）や「中央時論」（中央學會）などに詩が見える。『詩稿』にも、掲載された雑誌の切り抜きが一箇所貼つてあるが、どの雑誌のいつの號なのかを明らかにすることはできなかった。

『詩稿』をめくつてゆくと、前半には語句や平仄押韻について細かく朱が入れているが、次第に圈點が増えて評價が上がっていく様が見てとれ、「二首敲金戛玉之奇聲。 穂山倬 敬批」と稱贊の語も見えらる。『詩稿』は多くくずし字で書かれているため、残念ながら筆者には讀解できない部分が多いが、中には「謝穂山賢兄惠納豆（穂山賢兄の納豆を恵むに謝す）」と題した詩もあり、二人の親しい交流の様子や、穂山の作詩に對する考えなども窺え、貴重な資料である。

なお、この資料は請求番號が「詩文182」となっており、鵜軒文庫のものである。「鵜軒文庫藏書目録 和漢書分類之部」（土肥慶藏手寫、一九二九年）を見ると、七二八頁に「眞如の月（詩）」という書名があり、「著譯編者 刊行年月」の欄に「穂山（竹本）元傑批正／柳江 針谷重懋稿／明治三十年□□（判讀不能）稿寫」とある。書名が漢詩集らしからぬが、他に該當するものが無く、題に「（詩）」ともあるので、これが當該資料だと思われる。土肥鵜軒がこの資料をどのようないきさつで入手したのかは不明だが、穂山や重懋が関わっていた三河郷友會には、鵜軒の大學時代の同級生である佐藤碧海（勤也）がいた。その縁もあつたのかもしれない。

注

- (1) 中學校設立については、武田三夫・山田東作『三河最初の中學校』（ちぎり文庫第十六集、豊橋文化協會、一九八一年）に詳しい。
- (2) 『愛知縣立豊橋聾學校八十年史』（愛知縣立豊橋聾學校八十年史編集委員會、一九七八年）に據る。
- (3) 『御津町史資料集』（御津町史編纂委員會、謄寫版、刊記なし）第二集に「叔叢禪師行狀記」が収録されており、その末尾に「叔叢禪師は長松寺七世大義和尚の後を繼ぎ文化八年、年廿八才にして住職となられ、境内に羅漢堂を築いて十六羅漢を安置し、梵鐘を造り堂宇什器を整備し、一方地方の若者育英の業に身を委ね幾多の人材潔物を育成せられたその功績は門人等が建てた門前の碑石に審である。實に地方稀有の名僧であつた。安政四年五月廿日齡七十四を以て入寂せられた。」とある。
- (4) 『東參故人百家詩存』および『郷土人物年表』（佐藤又八、閑翠書屋、昭和十六年（一九四一））では「正昭」としているが、『其一族』の家系圖をはじめ他の箇所では「政昭」となっている。
- (5) 『三河文學』（小泉良之助編、世賜堂）は明治三十五年（一九〇二）四月から明治三十六年（一九〇三）三月まで刊行され、翌月、十二號から「三河之友」と誌名が改められた。さらに大正元年（一九一〇）には「三河之大勢」と改名されている。「三河文學」から「三河之大勢」については、『新編豊川市史』第三卷（通史編）（新編豊川市史編集委員會編、二〇〇七年）

第三章「大正時代から昭和時代へ」第九節二「月刊雜誌『三河之大勢』」に詳しい。

(6) 「三河之友」第十二號は豊川市所藏本を見せていただいた。

(7) 『三河風雅』は平松貞・山本壽編、平松氏刊。關西大學圖書館藏本を使用した。

(8) 『參河郷友會雜誌』は三河郷友會が月刊で発行し、第一號（明治二十一年（二八八八）十二月）から第六十八號（明治二十七年（二八九五）七月）まで續けられた情報誌である。三河郷友會については、拙稿「資料紹介「參河郷友會雜誌」文苑欄掲載漢詩文題目一覽」（『學林』第七十四號、中國藝文研究會、二〇二二年五月）を参照いただきたい。

(9) 『鴨東叢譚』は東加茂郡足助町（現豊田市）の鴨東社により月刊で発行された雜誌である。「とよたの事典」の『鴨東叢譚』項（豊田市／文化財デジタルアーカイブ、<https://adac.jp/tyota-city/text-list/d100010/h006970>、最終閱覽日：二〇二五年十月二十六日）に據ると、「現在、28年9月の第6號まで所在が確認できる」という。筆者は第一號から第三號までを入手したが、第四・五・六號は未見。

(10) 圓福山妙嚴寺（豊川稻荷）のこと。嘉吉元年（一四四一）に開創された。詩の中には「龜岩」という語は無く、詩の「龜嶼」はあるいは「龜岩」の誤りではないかと思われる。なお、龜岩島は一九七三年に埋め立てられ、現在は陸續きの龜岩臨海公園となっている。

(11) 生田硯川（鳳來峽の山水）（エビスヤ商店、大正十二年（一九二三））に據ると、鳳來峽（現新城市）を貫流する三輪川は、別名板敷川ともいい、特に大野村附近は名硯（別説では砥石）が産出されたため、硯川と稱されたという。

(12) 「新愛知」は名古屋に本社を置いて愛知縣で発行された新聞である。もとは「無題號」から「愛知繪入新聞」となり、明治二十一年（一八八八）に創刊された。昭和十七年（一九四二）に名古屋新聞と合併して株式會社中部日本新聞社となった（「社史・沿革」「中日新聞社」サイト、<https://www.chunichi.co.jp/info/enkaku>、最終閱覽日：二〇二五年十月二十六日）。「新愛知」紙面データは、豊橋市中央圖書館所藏の郷土新聞データベースより複寫した。もとの印刷状態が悪い部分があり、文字が不鮮明で解讀できない部分は「□」とし、不確定なものは下に○で候補を示した。なお、評の「杉南」は津田杉南で、「對琴山人」名義で「詞林」欄の漢詩評を擔當していた。津田杉南（文久三年（一八六三）〜大正九年（一九二〇））は、名は英彦、字は子直。號は杉南ほか旭廬・笛樓・對琴山人などの別號があり、

晩年は篠谷道人とも稱した。『杉南遺稿』（一九六二年序、川島清堂編、津田久發行）がある。

- (14) 「杉南曰」と書かれていないが、末尾に「對琴山人讀」とあり、杉南評である。以下の「新愛知」の【評】も同じ。
- (15) 欄の末尾に「對琴山人讀」とあり、注(13)の『杉南遺稿』には「旭廬」が別號とあるので、「九日廬主人」も杉南の別號であろう。
- (16) 遠山恭平編『戦捷餘韻』（遠山恭平、明治三十八年（一九〇五）の「靜學 戸田忠正」の注に「字徳文、別號仙湖、水戸人、住豊橋」とある。
- (17) 初山逸也『明治詩話』卷一（青木嵩山堂、明治二十八年（一九〇五）、東三河文化人名事典編輯委員會『近世近代東三河文化人名事典』（未刊國文資料刊行會、二〇一五年）および『三河最初の中學校』に據る。
- (18) 平松小露（鴻城）については、初山逸也『明治詩話』卷一に紹介記事がある。『國之礎』に據ると、慶應三年（一八六六）生、寶飯郡國府村の人。明治二十八年（一九〇五）八月寶飯郡衙に就職、同三十九年（一九〇六）に上京、土居香國主幹の隨鷗吟社などに参加しながら、自らも鳴世詩會を創設した。同四十一年（一九〇八）より豊橋市役所に勤めたが、大正二年（一九一三）頃に辭職している。在職中から豊蘭吟會を立ち上げ、參陽新聞や「三河之大勢」等に多くの作品を掲載した。漢詩集に『鴻城閣小稿』全四編等がある。
- (19) 戸田靜學については、萩原正樹『詞譜』及び森川竹礫に關する研究』（中國藝文研究會、二〇一七年）「附論 日本における詞の諸相」第三章「靜

學詞存」に詳しい。

- (20) 『靜學詩鈔』は萩原正樹先生の所藏本を見せていただいた。
- (21) 資料によつては「針ヶ谷」と表記されており、自筆の資料に於いても雙方の表記が見える。『詩稿』でも後半になると署名が「針ヶ谷」となっており、それにより書名が「針ヶ谷」となっているのだと思われる。
- (22) 『愛知縣南設樂郡誌』（愛知縣南設樂郡、明治四十三年（一九一〇）による。なおこの書では「針ヶ谷重懋」と表記している。
- (23) 穂山宛の葉書に「辭官欲之東京□（判読不能）爲諸友」という詩が書かれており、「余與田中菅江櫻井謙皆三河之人也。而共奉職于三河久矣。今各寓在東京。詩中故云
三人皆解綬 載筆入東京
何棄家鄉可 尙將督學生」という。
- (24) 注(22)の『愛知縣南設樂郡誌』には「二月四日生」とある。

※「百花欄」の一部は芳村弘道先生・萩原正樹先生のご所藏本を、『靜學詩鈔』は萩原先生のご所藏本を見せていただいた。また「三河之友」の閲覽に際しては豊川市教育委員會生涯學習課文化財係の前川様に、郷土新聞データベース紙面PDFデータの印刷では豊橋市中央圖書館の職員の方々に大變お世話になった。ここに厚く御禮申し上げます。

（本学文学部教授）